



重松清
ま え に
その日の

Kiyoshi
Shigematsu

その日のまえに^ひ

二〇〇五年八月十日 第一刷発行
二〇〇五年十月十五日 第七刷発行

著者 重松^{しげまつ}清^{きよし}

発行者 白幡光明

発行所 株式会社 文藝春秋
〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 〇三―三二六五―一二二一



印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁・乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。
小社製作部宛、お送り下さい。定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-16-324210-4

目次

ひこうき雲 5

朝日のあたる家 49

潮騒 91

ヒア・カムズ・ザ・サン 131

その日のまえに 171

その日 211

その日のあとで 253

装丁
吉田浩美・吉田篤弘

その日のまえに

ひ
こ
う
き
雲

まっさらの鉛筆が一人に一本ずつ配られた。深緑色のHB。手に取って鼻に近づけてみると、近所のベニヤ板工場と同じ、安っぽい木のおいがした。

「はい、もらった鉛筆は机の上に置いて、手は膝っ」

クラス担任の村田先生の声に、ざわついていた教室は少しずつ静かになった。やじろべえみたいに真ん中を持った鉛筆をゆらゆらと振って「曲がっただろ、曲がっただろ」と最後まで騒いでいた河野も、まわりの席の女子から目配せされると、ちよっとすねたような顔をして椅子に座り直した。

先生は教室を見渡して、廊下にいちばん近い列の、前から二番目——ぽつんと空いた席にしばらく目を留めた。

僕たちも黙り込む。ふだんは「動物園」と呼ばれるほど騒がしい六年二組の教室が、「水族館」か「植物園」になってしまった。

先生がまた正面に向き直ったとき、窓の外から大きな音が聞こえた。濁った低い音に、キンと

した甲高い音がかぶさって響く。窓の外に目をやると、離陸したばかりのボーイング747が見えた。パンナムだ。尾翼のマークでわかった。自然と頬がゆるみかけて、あわてて唇を結んで表情を引き締めた。

飛行機が飛び去るのを待って、先生はあらためて僕たちを見つめ、僕が微笑みを消すのと入れ替わるように、寂しそうな笑顔になった。

「みんなに挨拶ができなくて残念だ、って言っていました。でも、心は伝わってるから、だいじょうぶよね？」

僕は目を伏せる。すぐ前の席の宮田もうつつむいて、椅子の脚を踵で蹴った。後ろのほうから咳払いが聞こえる。テッチャんだ。膝を下からぶつけて机をガタガタ揺らしているのは、たぶんコウちゃんだろう。

「今度、みんなで岩本さんに手紙を出しましょう」

教室は静かなままだった。先生が「あ、でも、部屋に飾ってもらえるように、色紙のほうがいいかな」と言い直すと、みんなのほっとした気持ちが伝わったみたいに、空気がふわっとゆるんだ。色紙なら一言ですむ。「早く良くなってください」「元氣になったら、またみんなで遊ぼう」「お見舞いに行くから」「手術、がんばれよ！」「早く退院できますように」……言葉が短ければ、嘘だって、うまくつける。

「色紙は今度、先生が買ってくるから、みんなで回して一言ずつ書けばいいわよね」

先生は「わよね」のところで僕を見た。目が合ったのを確かめると、僕の三列右隣——女子のクラス委員の山本美代子に向き直って、「寄せ書きができたら病院に持って行ってあげようね」と笑う。

美代子は優等生らしく背筋をピンと伸ばして、「はい」と答えた。さっきの先生の話も、きつとまっすぐに前を向いて聞いていたのだろう。

「鉛筆、たいせつに使わなきゃね」

先生はそう言って、噛み痕^{かみあと}のついたタケシのちびた鉛筆を取り上げ、「こんなふうにしちゃいけませんよお」とおどけた声でクラスのみんなを笑わせようとした。だが、笑い声はばらばらとしかあがらない。先生もすぐに鉛筆をタケシに返して、そこから先はふだんどりの『終わりの会』の進行になった。

僕は机の上の鉛筆にぼんやりと目をやって、笑うタイミングを逃したままの頬に息を溜めた。笑えるような話ではない。六年生の二学期にもなれば、それくらいはわかる。ほんとうはもっと悲しんで、涙ぐらい浮かべたほうがいいんだろうな、とも思う。それができない。僕も、他の奴らも、みんな。笑うことも悲しむこともできないから、教室の沈黙はひどく重苦しい。

まだ端を削っていない真新しい鉛筆は、ふだん見慣れた鉛筆よりも一回り太く見える。のっぺらぼうのお化けみたいにも。

飛行機が、また飛んできた。今度は着陸の態勢だった。ルフトハンザ。体の細い水鳥が翼を広げて飛び立つマーク。鉛筆に羽根が生えたみたいだと、いつも思う。

飛行機の音が消えたあと、唇をすぼめて、頬の息を鉛筆に吹きつけた。ころん、と転がすだけのつもりだったのに、鉛筆は意外とあっけなく、ころころころと、机から落ちてしまった。

「あ、いま死んだんじゃないか？」——隣の席のヒデが小声で言った。

「ばーか、と僕は口の動きだけで返す。」

ヒデも自分の冗談のヤバさに気づいたのか、それ以上はなにも言わずに、先生が読み上げる算

数の宿題の範囲を連絡帳に書き取っていった。

床に落ちた鉛筆は、宮田の椅子の下まで転がっていた。足を伸ばして鉛筆を引き寄せ、そっと拾い上げた。筆箱にしまったあとで、足で踏んで引き寄せたのはよくなかったかな、と思った。

岩本隆子の顔が浮かぶ。こっちをにらんでいる。男子のいたずらを見つけて「先生に言うよ!」と脅すときの顔だ。女子のおとなしい子の失敗をすけすけと責め立てて泣かせてしまうときの顔でもある。

これが笑顔だったら胸がじんとしたかもしれないのに、太い眉毛を吊り上げた目つきの悪い顔しか、僕には思い浮かべられない。みんなもそうだと思う。

岩本隆子はいつも怒っている。だから嫌われている。男子からも、女子からも。

陰で呼ぶときのあだ名は「岩」と「隆」を音読みして「ガンリユウ」——女子が名付けた。もっとも、たとえそのあだ名を知ったとしても、ガンリユウはちっとも悲しまないだろう。クラス全員を問い詰めて最初に名付けた子を見つけ出し、その子が泣いて謝るまで怒りつづけるだろう。そんなガンリユウが、遠い町の大病院に入院した。病院の中の学校に転校もした。

長い入院になるらしい。難しい手術を受けるらしい。手術が失敗したら——先生はなにも言わなかったが、もしかしたら死んでしまうのかもしれない。

一人に一本ずつ配られた鉛筆は、ガンリユウのお母さんが「いままでみんなにお世話になったお礼に」と持ってきたものだった。

これがいづの形見になるのだろうか。

筆箱に入れた鉛筆をまた取り出して、木のおいを嗅いだら、鼻の奥がツンとした。

昔ばなしだ。いまから三十年近く前——僕たちの町の空を、世界各国の飛行機が飛び交っていた頃の話。

「なんで急に思いだしたの？」

乗換駅のホームで電車を待っているときに、妻の奈江に訊かれた。

「同じ駅なんだ」

「はまかぜ台？」

「うん……昔はそんな洒落た名前じゃなかったんだけど、同じ駅だと思うんだ、病院があったのって」

「あ、でも、わかる。あそこ、大きな病院とか似合いそうだよ。空気もきれいだし、景色もいいし」

奈江の両親もその環境に惹かれて、九十歳を過ぎた母親——奈江のおばあちゃんを、はまかぜ台にある介護施設に入所させた。先月のことだ。アルツハイマーの進んだおばあちゃんは、ヘルパーさんに車椅子を押してもらって海を一望できる芝生の庭を散歩するのが、なによりの楽しみなのだという。初めての面会に出かける僕たちも、奈江が手作りした弁当を提げて、おばあちゃんと一緒にささやかなピクニックを愉しむつもりだった。

「ねえ、桜並木って近所じゃないの？ もしあるんだったら、今日、おばあちゃんをお花見に連れて行ってあげたいんだけど」

「そこまで覚えてないって」

苦笑して、「俺が行ったのって秋の終わりだったんだし」と付け加えた。

ホームのアナウンスが、電車が間もなく到着することを伝えた。地下鉄から乗り入れる各駅停車だった。

「パパ、これに乗るの？」

一人息子の晴彦が少し不服そうに言って、「一本待ったら急行が来るんじゃない？」と電光掲示板を指差した。

はまかぜ台は急行の停車駅だ。所要時間は三十分——各駅停車なら、その倍以上の時間がかかってしまう。

だが、僕は「途中までこれに乗っていこう」と言った。

「でも、すぐに急行に抜かれちゃうよ」

「いいんだよ、その次の急行に乗れば」

得心しない様子の晴彦に、奈江が笑って「思い出にひたりたいんだって、パパ」と声をかけた。昔、パパが住んでいた町が途中にあるから、ゆっくり見たいのよ」

ね、そうでしょ、と目で訊かれた。「そんなのじゃないよ」と口では返したが、図星だった。

家を出るときには考えていなかったが、いま、ガンリュウのことをほんとうにひきしぶりに思っだして、急に懐かしさがつのった。

「でも、パパの家って、おじいちゃんとおばあちゃんの家でしょ」

「引越したんだ、パパが高校生になるときに」

「なんで？」

「国道のバイパスが新しくできることになって、ちょうどパパの家が道路の真ん中になっちゃったから、それで立ち退いたんだ」

「じゃあ、いまは道路になってるの？」

「ああ。電車からも見えるけど、トラックがびゅんびゅん走ってるよ」

「だったら見てみようがないじゃん」

「……だな」

身も蓋もない晴彦の言葉が、かえって耳に心地よく響いた。

小学六年生——あの頃の僕たちと同じ年。ふだんはテレビとマンガの話にしか興味がない息子の幼さが少しもどかしく、「だいじょうぶなのか、来年から中学生なんだぞ」が口癖になっていたが、考えてみれば、あの頃の僕たちだって同級生の女子からしょっちゅう「男子はガキなんだから」とあきれられていたのだ。

電車がホームに入ってくる。「よし、まあ、とにかくこれに乗ろう」と晴彦の肩を軽く押し、電車の音に紛れさせて、言った。

「晴彦の同級生で、死んじゃった子なんていないよな？」

聞こえなければそれでいいと思っていたが、晴彦はあっさり「いるわけないじゃん、そんなの」と答えた。「まだ小学生なんだから」

だよな、と笑った。

笑ったあとで、ため息を飲み込んだ。

ガンリユウ本人よりも、むしろガンリユウの両親の悲しみを思うと、胸が締めつけられる。僕も三十年ぶん、おとなになったということなのだろう。

一学期の頃のガンリユウに病気の気配はまったくなかった。クラスの女子でいちばん背が高く、「ガンリユウ」の語感にふさわしいがっしりした体つきをして、女子にしては低く太い声でしゃべり、地黒なので目立たなかったが、よく見ると鼻の下の産毛がうっすらと黒ずんでいた。僕たちはよく「あいつはほんとに男なんじゃないか」と陰口をたたいていたし、そうだ、僕はガンリユウの陰口のなかで初めて「ふてぶてしい」という言葉を覚えたのだった。

そんなガンリユウが、二学期になると急に学校を休みがちになった。十月からはずっと欠席がつづいて……そのまま、転校していった。

村田先生は病気の名前を教えてくれなかった。ガンリユウもなにも言わなかった。そんなことを打ち明けるほど仲のいい友だちはいなかったし、もしかしたら本人にも明かされていなかったのかもしれない、といまは思う。

噂話では、白血病だとか心臓病だとか骨肉腫だとか、マンガやドラマに出てくるような病名がいくつも飛び交ったが、ほんとうのことは結局誰にもわからないままだった。

ただ、病気になったのがガンリユウだということが、僕たちをむしように重い気分にした。

「違うよな、こういうのって」

ガンリユウが転校して何日かたった頃、テッチちゃんが学校帰りにぼつんと言った。

「だってさ、ガンリユウだと、やっぱり違うと思わない？ ベンも」

僕はテッチちゃんが蹴っていた小石を代わりに一蹴りして、「まあな」と言った。